

ご縁は常に身近なところにやって来ている。待っているともしえよう。普段、そんなことにいちいち気を留める人はいないであろうし、大方は、ご縁の磁力を感じることもなく通り過ぎていく。

生活するにはそれでいいのだが、共時性現象に関心を持つものとしては、誰も気づかないようなちよつとした触れ合いにも、「あれ」と息を呑んで心の目が開くのである。

何げなく心引かれるところには、実は何かがある。心を引っ張る一瞬には必ず何かがあるのである。

考え方を逆転させるなら、私たちの生体というのは、物性体（肉体）であると同時に、心性体（心）でもあるから、いわば、肉体一〇〇％であり、心一〇〇％という魔法まがいのようなもので、一生命体が二〇〇％で一体という摩訶不思議なことにもなるのである。

る。

この二〇〇％のいのちは、さらに電気を運び、磁気も運びているから、プラスとマイナスの引き合いと押し合いが生じる。

常識で考えれば、物質一〇〇％のところには何一つ入らないのが当たり前なのだが、そうではないところがこの生命体の不思議。物質一〇〇％に、さらに心が一〇〇％、それも易々と同居しているのだから驚きである。自分というこの生命体は、心であると同時に肉体である訳である。

心ばかりの自分でもなければ、肉体ばかりの自分でもない。肉体であると同時に心でもあるという不離一体の姿こそ、自分の正体であると、私はいつもそう思っている。

いのちは両性

物性と心性

両極両性でいのち

いのちはバランス

両極両性でいのち

一元一体で二象体

不離一体・融合一体は

いのちの宿命

心だけのいのちはなし

肉体だけのいのちもなし

という具合に、生命体は、実に神秘に充ちた存在であるという思いが目を追うごとに強まっていく。

何も考えずに道を歩いていても、ふと心を引かれることや、嫌な思いを感じることも少なくない。それは、心にも肉体にも電磁波があるからだとは私と考えている。

日頃から、心の積み重ねが、いのちの中にどんどん入っていく。その心の集合体が魂であると私は考えているから、どんな魂がどんな勢力圏を張り合っているのか、自分のいのちの世界に関心をもっている。

心が成長し、自分のいのちの中にそれぞれの色合いを持った心の集団をつくり上げてきた魂は、それをたぐっていけば、先祖がどうのこうのというよりも、人類全体を、さ

らにさかのぼれば、とてつもなく深く広い心性世界まで繋がっている。だから、人類は皆いのちの親子であるともいえる。極言するなら、人類の魂（心性）の岩盤は一つのなであり、一人ひとりの魂にもその岩盤が共存して共有している世界だと私は思っている。人類皆いのちの親子であり、心の親子であるともいえる。

そのことは取りも直さず、自分が暗い心やよくない心になればそれは自分だけの問題ではなくなり、他の人にもその暗い心や、よくない心が、いのちの霊脈を通して知らず知らずに流れていくということになる。一人でも多くの人たちが、明るく良い心で生きていられたいと思う。昨今の人類世界は現実には暗い面の映りが強く、戦々恐々としているのが辛く私に伝わってくる。

単独一体のいのちはなし

みんな繋がっているいのち

順々繋がっているいのち

世界はいのちで一体

魂はどこかに必ず繋がっている

共振共鳴で響き合う魂

霊脈を呼び起こせ！

良い霊脈を呼び起こせ！

さて、時は平成五年にさかのぼるが、出先で見た朝日新聞の平成五年二月二日づけの広告欄に心が引かれた私は、そこをスクラップして持ち帰った。それは、「貿易は国を滅ぼす」(ラビ・バドラ著)と「父吉田茂」(麻生和子著)という、二冊の出版案内であった。

だからといってその本を注文することもなくそのままにしておいたのだが、それから二月後の年が改まった平成六年二月一八日、妻が一冊の本を買ってきた。「父吉田茂」であった。

いずれは読みたいと思っていた本。頼んだ訳でもないのに、きっと同じような機微が妻に働いたのである。これも以心伝心の共時性といえる。

早速読んでみた。前に書いたように、それとなく心が引かれるということの裏には、必ずや何かがあるのである。共振共鳴するときというのは、心の底に何かしら通じるも

のが必ずあるからその思いが無意識に心をつき動かすのである。読んでみて、それがはつきりとした。

そんなささいな事かと思われるかもしれないが、それが私が大切にしている世界なのである。

日本の国は、第二次世界大戦で大敗して無条件降伏をしたが、その戦後処理と復興の重責を担ったのが自由党総裁の吉田茂という方であった。

昭和二三年から二九年までの七年二月月の長期にわたって、荒廃し、疲弊した日本国を、独立国として立ち直らせた偉大な業績と尊厳なる人格に強く引き付けられる。

名前が同じ「茂」というだけでも私はうれしくなる。文字一つでも共振する心の因子となるが、本を読み進めてみて、吉田茂の生まれた月日が私と同じであることに気がついた。

吉田茂は明治一一(一八七八)年九月二二日生まれ。

私が昭和九年九月二二日生まれ。

さらに、吉田茂の命日が昭和四二年一〇月二〇日だが、私の養母の命日が昭和五八年一〇月二〇日なのである。



平成 21 年 7 月 22 日付、山形新聞朝刊を転載

数字というのは確かに言葉のひびきを持っている。数字にはそれなりの意志性が秘められていて、能動的な意志表現が感じられてならない。ましてや、文字・数・色とは人類文明の三愛の神器といえるから、心の全権大使役の働きを持ち、これほどすばらしい意志表現媒体はない。

特に、数字の持つ意志性には格別のものがある。そして、互いに共振共鳴して話し合っていることが私には伝わってくる。

肉体は亡くなっても魂は生きている。生きているからこそ今の自分があるのであって、これこそが魂不滅の明白な証しといえる。

「歴史は繰り返す」という。このことこそ、死んでも生きているのちの証しであるし、魂不滅の証しとなる。この「歴史は繰り返す」を実証するような現実の話を中心に紹介する。

本稿を書き進めている最中のことだが、日本国の政治に大きな変化が起きた。平成二一年七月二一日、衆議院が解散。翌二二日から、自民党の麻生太郎氏と民主党の鳩山由紀夫氏が雌雄を決する政権闘争に突入した。

吉田茂が政権を担当することになったのには、当時の自由党総裁鳩山一郎が組閣直前にマッカーサー指令下で公職追放されて、その後継に吉田茂が起用されたという経緯があった。鳩山と吉田は友人関係にあったという。

ところが、昭和二六年に追放解除された鳩山一郎は、吉田茂に政権移譲を求めたが、拒否された。その後、鳩山と吉田の確執が続いたといわれ、吉田退陣により政権担当の座についた鳩山一郎は、昭和三〇年、現在の自由民主党を結成して総裁総理になっている。

奇しくも、第四五回衆議院選挙では、自民党総裁麻生太郎氏が吉田茂の孫であり、民主党代表鳩山由紀夫氏が鳩山一郎の孫であり、代が変わって両雄の対決となった。まさしく、魂の復活戦の様相を呈している。その火ぶたを切った日が、

“七月二二日”

であることと、吉田茂の誕生日が、

魂の流れが違うのだ

霊脈が違うのだ

魂が問題だ

吉田茂の魂にアクセスしたいものだ

いのちのネット・ワークを通じて

魂のネット・ワークを通じて

霊脈を呼び起こせ！

呼び起こすには

その良き魂を学ぶしかない

漂流三七日間を守った海亀

三分間位呼吸が停止すると仮死状態になり、五分間停止したなら死んでしまうであろう。

馬鹿げた話だが私にはそんな練習を重ねた一時期があった。呼吸停止のタイムに挑戦したのであったが、片や、食の停止も何度か続けていた。妻と一緒に体験してみたのだが、二十一日間が最長の断食であった。断食といっても飲み水補給の中で続行したのであって、水分をまったくとらねば十日くらいで死線を歩くことになるのではないのか。

とにかく「呼吸と食」は生きるうえでの絶対条件であり、どちらを欠いてもいのちの終わりにつながる。ところが、そのいのちの終わりを終わらせないで九死に一生を得た海難事故の話が伝えられた。往々にして奇跡というものには、異次元世界からの守りを感じられてならない。

異次元世界とは、知性を主体とする人間以外の動物、植物、鉱物などの精神性のあらわれと私は考えている。

時は、平成六年二月九日に発生した漁船沈没と乗組員九名の漂流の話である。

沖縄県那覇市のマグロはえ縄漁船第一保栄丸（五九・九八トン）に事故が発生したのは二月九日であった。エンジン室から浸水して操船不能となり、船長の本村実（五二才）さんとフィリピン人乗組員八名は救命いかだで脱出して漂流三七日間の死線を生き延びた奇跡の生還であった。

太平洋上で小さなゴム製の救命いかだに九人が膝を抱えて足を伸ばすことさえもままならぬ中で、食料は四、五日で底をつき、つづいて飲み水もなくなった。ついに風の吹くまま、潮の流れるままに命を天にまかせ海にまかせるほかはない漂流の日々を生き延びたのであった。

当時の新聞や週刊誌などで報じられた記事を見ると、そこには救助されるまでの中に、異次元からの守りの意志があったとしか思えない「数霊と海亀」の働きが浮かんでくるのである。次にその数霊を列記して考えてみる。

「数霊」八

- ① フィリピン人乗組員が「八名」
- ② フィリピン人を雇用したのは「八年前」
- ③ 海亀との出会いが三月「八日」

漂流から二八日目のこの日、海亀が出現して救命いかだの周りを二時間以上もゆつたりと泳ぎ回る。当時の状況を本村船長から取材した記事が次のように伝えている。

「この頃には体力も弱ってきていましたし、もうどっちでもいいと思う瞬間もありました。頭がボーッととして、考える気力がなくなるものなのです。思い起こせば、とても不思議なことがあったのはこの頃です。一抱えもある大きな海亀が救命ボートに近寄ってきて、回りをゆつたりと泳ぎ始めました。海亀というのは臆病な生き物で、人間に近づくことは絶対ありません。ちょっとした音でも聞きつけ、素早く逃げるものなのです。だからボートの回りを泳ぐのは理解できないことでした。

二時間ほどたって、乗組員の一人がその海亀を抱き上げて救命ボートの真ん中に置きました。この時期になるとみんな、何でもいいから口の中に入れてほしい思いで一杯です。フィリピン人は、海亀を引っくり返しました。

しかしわたしたち九人は、海亀の腹をじっと眺めながら約一〇分間、誰も一言も発せ

ずにいました。そしてなぜか、海亀を放してやったのです。海へ帰った海亀は、ボートの回りを大きく一周した後、西へ向かって泳ぎ去りました。私には、海亀がボートを何度か振り返りながら遠ざかって行ったように見えました。

それから一週間後、私たちは西の方角に位置するミンダナオ島の漁民に救助されることになったのです。私も乗組員たちも、あの海亀を食べなかつたから助かったのだと、本気で思っています。きっとあの海亀は、浦島太郎が助けた亀の子孫に違いない（笑）、とさえ考えているんです…（以上は週刊文春一九九四、三、三二号の一九九ページを転載した）

④ 救助日の和数が「八」

救助されたのが三月一七日。一七日の和数が八となる。

⑤ 救助現場からの帰路が「八時間」。

救助してミンダナオ島までの所要タイムが約八時間

以上、数霊「八」が動いていることが分かってきた。

次に、

「数霊」九

① 乗組員が「九人」

② 漂流開始が二月「九日」

③ 海亀との出会いから救助される日までの日数が「九日」

④ 救助した小型マグロ漁船（二トン）の乗組員が「九人」

以上、数霊「九」が働いていることが分かる。

次に、

「数霊」三七

① 漂流日数が「三七日」

② 救助した漁船船長・ギナレス・デオドーロ「三七才」

「数霊」二八

① 海亀と出会うまでの日数が「二八日」

② 漂流した距離が約二八〇〇km

以上のように、八、九、三七、二八という数霊が働いている。数字には意志があるという大前提にたつて考えれば、八の数霊から何を受け取れるのか。八は一体何を語ろうとしているのか。八がいわんとする中心となつて、八人のフィリピン人たちの魂が強く働

いていたのではないか。その魂が海亀を呼び寄せたのではないのか。彼らは、日に三回の礼拝をするという。また、飢餓の絶頂にありながらも、海亀を食べようとはしなかったという。

頭がボーンとして、考える気力さえも薄らいでいる世界こそ、海亀に通じる次元といえよう。

食べると神様から罰が当たるとも思ったようである。海亀が救命いかだの周りをゆつたりと回り始めたのが3月8日ということも、その海亀には、異次元からある意志波動と同調して、魂の融合が起きていたのではないのか。

その異次元の意志とは、すなわち、彼ら八人の魂との共有現象が、海亀のいのちに起きていたのではないのか。その証しとして、八日に現れたということも考えられると思う。

では、異次元とはどういう世界なのかといえば、知性を主体とする現代人の精神性を、ずっと掘り下げた世界、すなわち、知性主体以前の心性世界のこと、それはどこにあるというものではない。各人のいのちの中にこそ異次元があるのである。万物共有の精神地盤でもいえようか。動物、植物、鉱物の果てまで共振共鳴できる世界を、私は異

次元世界だと考えている。この世界でなら、人間の魂と海亀の心性世界は、以心伝心で語りあえる世界ではないかと思うのである。

海亀たちと通じ合える人間の精神状態であるとき、きっと海亀は人の心を受け取って

助かると思わなかった

本村船長 漂流の日々を語る

37日間日誌に再現



取材された、漂流の様子を記述している本村船長の自筆日誌。写真：山形新聞

鳥食へ海水飲み…船や飛行機、何度も遭遇

【山形県山形市】山形新聞記者が、漂流中の本村船長（67）に取材した。本村船長は、3月8日、山形県沖で乗組員とともに遭難し、漂流した。37日間の漂流生活の日々を、本村船長が自筆した日誌に再現する。本村船長は、漂流中に鳥食や海水飲み、船や飛行機、何度も遭遇した。本村船長は、漂流中に「助かると思わなかった」と述べている。

雪期 ハス埋まり6日間
深さ15センチ 生存3人

平成6年3月20日付、山形新聞朝刊を転載

くれると思うが、常にそうだとはいえない微妙千万な心の世界であるとも思うのである。海亀を救命いかだに引き揚げて、中央に裏返しをした。そのとき、本村船長は、食べればいいのにと、ふと思つたという。だが、置いたままにして九人は見つめるばかりで、無言の中で海に帰したのである。

そのとき、海亀に通じる異次元世界での心の交信ができていたと思われる。八日に、八人のフィリピン人の魂と共振共鳴したと思われるし、海に帰された海亀は、何度か後ろを振り向きながら西へと去って行ったという。振り向いたのは気のせいばかりではないと私は思っている。

西へ泳ぎ去ったという西に心を向けると、西は数霊のひびきが二四となる。さらに、二四は、フシ（不死）という言葉のひびきに還元されても不自然ではないと思う。

不死（二四〓西）には、「決して死にはしません」というメッセージが感じられる。そして、海亀と別れてから九日目の三月一七日に救助された。一七の和数は八の数となり、海亀とフィリピン人八人の魂が共鳴した証しととらえてみても決して不自然ではないと思うのである。

三七日間の漂流と、救助した船長が三七歳で、その船の乗組員が九人で、遭難した漂

流の九人を救助した。

フィリピン人八人の魂に共振した海亀は、西方へと不死（西〓二四）の道明かりを残して去って行った。

九人のいのちを守った八日の海亀は、九日目の一七日（〓八）に、その命の証しをたててくれたのであろう。

戦争を終わらせた八一五字

日本が超大国の米国を相手に太平洋戦争へ突入したのは、昭和一六（一九四一）年二月八日のことであった。

当時、国民学校に入ったばかりの私たちは、戦争という実態をまったく知らないから、国を守る兵隊さんの出征していく姿がとても格好よく目に映ったものだった。学校の講堂に全員集合させられて出征兵の壮行会を見るたびに憧れた。壇上で兵士になる若者が、「それでは皆さん元気で行ってまいります」

と、満面紅潮させてあいさつをする姿はとても眩しく輝いて見えた。

そうした壮行会も回を重ねていく中、晒しの白布で包まれた骨箱を前にして合同慰霊の場も増えてきた。小学生の私たちは、国を守った名誉の戦死者として、深く頭を下げることしかできなかったのである。

体育館には、実弾をこめれば実戦できる銃が数多く立て掛けられていたし、確か三八式歩兵銃という鉄砲のように記憶しているのだが、引き金を引く前に弾をこめる操作が一つの訓練でもあったようだ。弾を装填する操作が楽しくてカチャカチャ触って、一つの遊び道具くらいの感覚でいじくり回していたのだが、それが人を殺傷する凶器などというイメージはまるでなかった。現代なら、銃刀法違反の罪人となる。

時代の教育とは恐ろしいもので、教育次第で、人の脳は随分と片寄った道具になるものである。マインド・コントロールは一種の麻薬である。国を挙げての殺し合いをやる戦争のために、その正義性だけを叩きこまれる。脳の働きは両刃の剣となり、毒にもなり薬にもなり、叩きこまれた脳が、その量の多少や期間の長短にもよるが、新しい脳に清められるには大変な努力と時間が必要となるのである。

戦争当時の教育現場では、それこそ戦士を鼓舞するような、死は名誉の戦死といって何ら疑問も起さない一種の聖戦気分をおおりに立てるような空気のなかで、国のため、天皇のためといわれた時代であった。子どもの心が、戦争の正義性に塗り替えられていた時代でもあった。

誰もがそれなりのエゴを持っているものであり、その自己主張や利己心ともいわれる

その中心軸で働くのが人の欲望である。

欲望もまた両刃の剣のようなもので、良くも働き、悪くも働くといったもので、その片寄りによっていろいろの問題を生むことになる。何事も進歩発展の原動力は欲の心あればこそであって、欲の心は決して悪者ではない。欲を何に向けるかそのコントロールが肝心であり、無益なエゴとエゴのぶつかりあいの弊害は、お互いに傷つけあい、果ては国益と国益を剥き出しにして收拾困難を呼び起こし、そして、紛争が起ることもありえるであろう。

争いは欲心のマイナス部分で起ることだが、そうした欲心も、自分で即座にコントロールできれば立派なもの、自己調和心こそ人の道の基本ではないかと私は考えるようになった。

第二次世界大戦までエスカレートした日本と米国。どちらにとっても正義と正義の旗を掲げた戦いであった。その戦争も昭和二〇（一九四五）年に入り、日本の敗戦は避けられない現実となった。連合国側から、対日戦争の終結を意図した「ポツダム宣言」が発表されたのは昭和二〇年七月二六日のことであった。広辞苑でポツダム宣言の頁を開いてみると、次のように説明されている。

「ポツダム宣言」

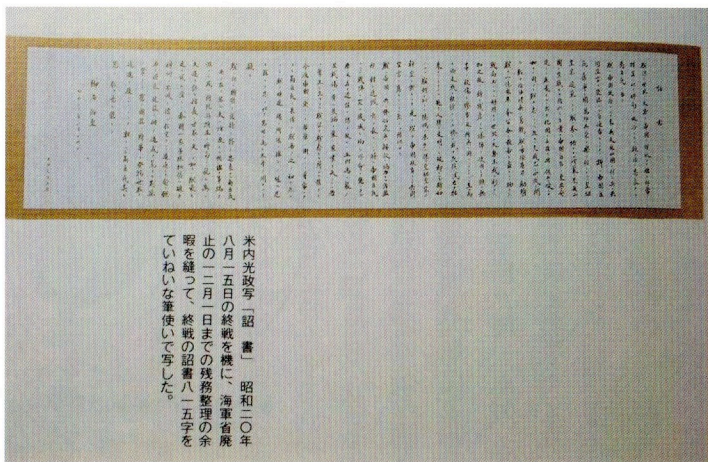
一九四五（昭和二〇）年七月二六日、ポツダムにおいて、アメリカ合衆国、中華民国、イギリス（後にソ連が参加）が日本に対して発した共同宣言。

戦争終結、日本の降伏条件と戦後の対日処理方針とを定めたもので、軍国主義指導勢力の除去、戦争犯罪人の厳罰、連合国による占領、日本領土の局限、日本の徹底的民主化などを規定。

日本ははじめこれを無視したが原子爆弾の投下、ソ連の参戦により同年八月一四日受諾し、太平洋戦争が終結。

昭和二〇年当時、情報の少ない田舎にいた私たちにも、日本の劣勢が手に取るように感じられました。

学校からの下校途中、爆音と共に急に姿を現した二機の戦闘機（確かグラマン戦闘機）が西の方から超低空でグングン大きくなり、翼を左右に揺らしながら迫ってくる。それが何であるか直感し、流れの早い農業用水路に飛び込んだこともあった。



先人記念館の目録より転載「815字の終戦詔書」

酒田市の機関区で機銃掃射された話も聞いた。雷鳴のような真昼の轟音も下校途中で聞いている。仙台沖からの艦砲射撃だと聞いた。米兵やロシア兵が上陸して、女は連れ去られ、男は金抜き（去勢）されるといふデマが飛び交った。また、竹槍もつくった。地方の田舎でさえもこんな状況で、戦況は否応なくわかるものなのである。

その頃、村にもそろそろ真空管ラジオが普及していたから、昭和二〇年八月二十五日の敗戦を告げる、天皇陛下の玉音放送を聞くことができた。

日本国は、七月二十六日に、連合国側からポツダム宣言を突き付けられたが、戦争の指導部はそれを無視した。もし受諾していたなら、広島と長崎の原爆投下は避けられたに違いない。戦争の暴走は最悪に至らないと停止できないようである。

そうした局限にあった政府・軍部の中でも、戦争終結に向けて、ポツダム宣言を受諾すべしという提言もあったが、その意見は反映されなかったといわれている。

平成六年四月二三日、盛岡市の先人記念館に立ち寄った私たちは、戦争終結に向けて一心に働いた方がこの地におられたことを知った。

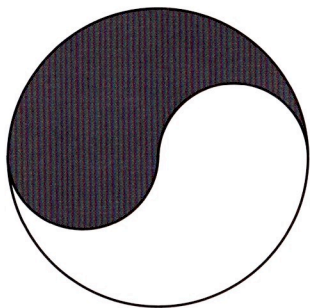
当記念館の案内図録から転載して紹介したいと思う。

良識の提督 米内光政よないみつまさ

海軍大臣・内閣総理大臣在職中の米内は、拡大する一方であった日中戦争に対しては不拡大の方針を提唱し、また日独伊三国同盟締結には英米との関係悪化を懸念し一貫して反対し続けた。…中略…一九四四（昭和一九）年七月に懇請されて海軍大臣として現役に復帰した彼は、当時の情勢から敗戦必死と判断し天皇の意志の下でポツダム宣言を受諾することを鈴木貫太郎首相に進言した。

「為萬世開太平」（萬世ノ為ニ太平ヲ開カム）―能筆で知られる米内はこの書を晩年多く書き残している。昭和天皇の終戦詔勅を象徴するこの書には平和への願いが込められており、米内の当時の心境を今に伝えている。（以上）

記念館には、米内光政が筆写した終戦の詔書が展



6-9 は絶対調和のシンボル

示されている。米内光政は八月一五日の終戦を機に、残務整理の余暇を縫って「終戦の詔書」(ポツダム宣言を受諾したときの詔書)を筆で書き写している。その展示説明を見る。

『終戦の詔書八一五字』

とあり、文字の数まで紹介していたことに私は強く心を引かれた。戦争を終結するため筆をとられた昭和天皇の文章(詔書)が、

八月一五日に符合する八一五字

になっていることから、尋常ならぬ神性意志が伝わってきたのである。

連合国側が日本に無条件降伏を迫ったポツダム宣言は昭和二〇年七月二六日。それを無視した日本は、人類史上初の原子爆弾の洗礼を受けることになる。

八月六日午前八時一五分、広島に投下。

八月九日長崎に投下。

八月一四日ポツダム宣言受諾(終戦詔書八一五字)。

八月一五日終戦の玉音放送。

以上から、数霊に秘められている意志的暗示性が次のように感じられる。

①八月六日の八一六の和数一四。一四は一四日のポツダム宣言受諾を暗示。

②八時一五分原爆投下。八一五は終戦日の八月一五日を暗示。

③六日広島、九日長崎に投下。六・九は調和のシンボルと受け取れる。円の中の6―9の姿を見れば勾玉にも似てびつたり収まる。広島と長崎は人類最初で最後の恒久平和の大調和を暗示。

④終戦の詔書に秘めた『八一五字』は、終戦日、八月一五日とし、「万世の為に太平を開く」という昭和天皇のご意志の象徴のあらわれではないのか。

数字を単なる数としてとらえるなら、無機的で計算の道具以上にはならないが、それでは数字の存在自体が無意味になってしまう。

数字にははつきりと靈魂(意志)が宿っている。心が宿っている。思いが宿っているのである。数霊は生きて物言う魂の代理人なのである。だから、共振共鳴共時性現象(通称Ⅱ偶然の一致)は、数字による靈魂の媒介表現が圧倒的に多くなり、物言う姿となって目の前に顯われる。

米内光政が筆写した終戦の詔書に添えられていた説明文

の「八一五字」という表示も、心に向ける者との出会いを待っていたのではなかったのか。昭和天皇の御霊と米内光政の御霊が、「萬世の為に太平を開かん」との思いを強くして数霊に魂不滅の光を発していた。

八一五字の魂の光、それは人の世に開く太平の光を開かんとする八一五字であると思ふのである。

八一と五の和数は一四となる。それは、意志（一四）の光であろう。

あとがき

透けて見えます
クラゲのように
透けて見えます
ミジンコのように
心の姿が見えたなら
ワクワク・ドキドキ
感動感激雨あられ
戦々恐々雨あらし
魂うごめくこのいのち

心の中は見えないからいいのかもしれない。見えたら互いに面倒になりかねない。見えるといっても交通信号の赤・青・黄色くらいがいいかもしれない。

それも棒グラフ式で相手の腹部から光を発することにでもなれば、案外生きるうえで都合がいいかもしれない。あらゆる面で活用もできてその効用は極めて高いかもしれない。青信号はいいに決まっているし、赤信号もまた役に立つ。だが、想像力を高めるうえであからさまにするよりは、わからない部分も大切となる。

ところが、科学力は日進月歩で進化している。すでに心の中も、近未来にかけて映像化出来つつあるような時代に入っている。夢や空想などが「見える日」が近いと言うではないか（国際電気通信基礎技術研究所の資料・平成二十年十二月十一日付、山形新聞）。

そうなれば偶然の一致といわれている出会いの縁の内幕がより一層はつきりとしてくるだろうし、偶然の一致は偶然ではなかった、という証明が科学的に可能な日もやってくるかもしれない。そうなれば今こうして共時性減少の体験記録を綴っていることは決して無駄ではないと信じている。

著者 菅原 茂

著者略歴・菅原 茂

昭和九年（一九三四年）山形県生まれ

山形県立酒田商工高等学校（現・酒田商業高等学校）卒業後、農業協同組合、商社、ダム工事、海中工事、ビル専門防水工事、旅館業、不動産取引業等を経て、自己改革と生命世界（生きる原点・心の原点）と共時性現象について、妻と二人三脚で探索を続けている。その間、鳥海山麓の原野を開拓、十二年間、鶴亀農場を体験。

著書

「酒乱（米のいのちが生きるまで）」（株）東京経済。「死んでも生きている―いのちの証し」（株）たま出版。

フォトエッセー「いのちのふる里」、「いのちの顔」等。

「神秘の大樹シリーズ第一巻（偶然が消える時）」おりづる書房。

「神秘の大樹シリーズ第二巻（ヒロシマとつる姫）」おりづる書房。